

『うつほ物語』における俊蔭の旅地

－「唐土」と「知らぬ国」の使い分けを中心に－

金 孝 淑*

(e-mail : hyosookk@freechal.com)

目 次

- 一 はじめに
 - 二 公的な立場から発せられる「唐土」^{もろこし}
 - 三 私的な感情から呼び起こされる「知らぬ国」^{し くに}
 - 四 「知らぬ国」という空間表現の重層性
 - 六 『うつほ物語』における異国呼称の機能
 - 七 おわりに
-
-

一 はじめに

『うつほ物語』は、一言でいえば、俊蔭一族の秘琴伝授と栄華の物語といえよう。その一族に類稀な栄達を齎した秘琴は、俊蔭の異国への辛苦の旅の末、持ち込まれたものであった。その異国への漂流を、俊蔭自身が「年いときなきほどに、父母を離れて、唐土へ渡されぬ。あたの風、大いなる波に漂はされて、知らぬ国に打ち寄せらる。深き悲しび、これに過ぎたるはなし。からくして帰りまうで来たるに、父母亡びて、空しき宿をのみ見る」¹⁾（「俊蔭」一・43～44）と語っているように、異国への旅立ちは、遣唐使としての栄光のみならず、私的な不幸をも招来したものであった。俊蔭の異国への漂流をどう捉えるか、それは

* 早稲田大学 日本古典籍研究所 客員研究員

1) 『うつほ物語』の本文の引用は、「新編日本古典文学全集」(小学館)による。ただし、私に表記、句読点を改め、ルビを省略した個所がある。また、本文中の下線や〔 〕内の注記などは、すべて引用者によるものである。

『うつほ物語』を理解する上で、欠くことのできない極めて重要な問題である。つまり、その旅が、一族に繁栄を齎した栄光のものだったのか、それとも悲劇だったのか。それを紐解くひとつの鍵として、まずその異国を指す名称の分析が必要ではないだろうか。というのも、上に引用した本文には、俊蔭が流された異国が「唐土」「知らぬ国」と、二つの呼称をもって語られており、これを考察することが、物語の理解に繋がると考えるからである。本稿では、とくに前掲引用にも見える「唐土」と「知らぬ国」を中心に、その意味内容を分析し、さらに物語における機能をも考えていきたいと思う。

二 公的な立場から発せられる「唐土」

俊蔭の漂流の地として語られる具体的な国の名称は、まず「波斯国」「唐土」が確認される。当初、俊蔭が流れ着いた場所は、次の①から③の引用本文にあるように、「波斯国」となっていた。

- ①唐土に至らむとするほどに、あたの風吹きて、三つある船二つはそこなはれぬ。多くの人沈みぬる中に、俊蔭が船は、波斯国に放たれぬ。
(「俊蔭」一・21)
- ②かくて、俊蔭、日本へ帰らむとて、波斯国へ渡りぬ。その国の帝、后、儲の君に、この琴を一つづつ奉る。
(「俊蔭」一・39)
- ③わが身を捨てて習ひし琴、この娘に習はさむと思ひて、かの波斯国より持て渡りし琴どもを取り出でて、二つの琴をば人にも知らせで、いま十を、りうかく風をば娘のにす。
(「俊蔭」一・41)

上記の引用本文①では、俊蔭一行が「唐土」に辿り着こうとした時、乗った船が「波斯国」に流れたとしている。これを読む限り、俊蔭が辿りついた場所は、「唐土」ではなく「波斯国」と読みうる。しかし、蔵開の上巻以降、俊蔭の旅は「唐土」と置き換えられる。その理由としては「漢詩文の家の伝統が再発見される必要」²⁾による物語の意図、あるいは「波斯国も「もろこし」のうちと意識し

2) 高橋亨氏 (1991) は、「俊蔭の「波斯国」から「天竺」への異郷への旅は、蔵開の中巻以来「唐土」や「唐」(稿者注一「唐」か)と置き換えられていた。俊蔭じしんは、唐そのものには渡らなかつたと読みうる。にもかかわらず、俊蔭は遣唐使としての成果をみごとに身につけた文人として位置づけられる必要があった。蔵開の中巻以降の作者の誤解、成立や交渉の矛盾というのではなく、主観的な二

ていた」³⁾などと解される。この物語の変容をどう理解すればよいか、それはさらなる分析を要するが、本節では、とりあえず用例数の圧倒的に多い「唐土」の意味内容を分析していきたい。次は、俊蔭が帰国してから、異国の旅から持ち帰った琴^{きん}を、嵯峨帝の前で演奏する場面である。

④帝〔嵯峨帝〕、大きにおどろきてのたまふ、「げにこの調べはめづらしき手なりけり。これはゆいこくといふ手なり。くせこゆくはらといふ曲なり。唐土の帝の弾きたまふに、瓦砕けて雪降るとなむいひたる。この国にいまだ見ぬことを、あやしうめづらき人の才かな。昔、二たび試みせしにも、その道のめづらしう勝れたりしかば、官をもその道にたまひ、学士をも仕うまつらするに、文の道はすこしたちろぐとも、その筋は多かり。この琴は、この国に俊蔭一人こそありけれ。学士をかへて、琴の師を仕うまつれ。東宮悟りある皇子なり。ものの師せむ人の難いたすべき皇子にあらず。心に入れて残す手なく仕うまつらせたらば、納言の位たまはせむ」とのたまふとき、俊蔭申す。「(a)年いときなきほどに、父母を離れて、唐土へ渡されぬ。(b)あたる風、大いなる波に漂はされて、知らぬ国に打ち寄せらる。深き悲しび、これに過ぎたるはなし。からくして帰りまうで来たるに、父母亡びて、空しき宿をのみ見る。(c)むかし、宣旨にかなひて、たびたびの試みをたまはりて、唐土に渡されぬ。父母あひ見ずして、長く別れて、悲しびはあまりありといへども、まねび仕うまつるいさみはなし。無礼の罪に当るとも、この琴はまねび仕うまつらじ」と申して、まかり出でぬ。
(「俊蔭」一・42~44)

長い放浪の旅を終え帰国した俊蔭は、帝の前で琴^{きん}の演奏をし、そしてその音色を聞いて感動した帝は、俊蔭に「学士をかへて、琴の師を仕うまつれ」と、東宮学士ではなく、琴の師として出仕することを命ずる。しかし、その帝の仰せに対して、彼は「知らぬ国」に「打ち寄せられ」「深き悲しび」を味わい、帰国してからは両親の死という悲しみに耐えなければならなかった、と自身の悲しい過去を吐露し、まったく応じないのであった。ここには彼の訪れた場所として「唐土」と「知らぬ国」の名が挙げられている。まず、(a)「年いときなきほどに、父母を離れて、唐土へ渡されぬ」の「唐土」は、俊蔭が遣唐使として渡航したという事実が述べられていると考えられる。そして、(c)「むかし、宣旨にかなひて、

重構造あるいはすりかえと考えるべきであろう」とされる。そして、「蔵開の巻は、始祖である俊蔭の琴^{きん}と漢詩文の才とを、女系と男系にふりわけるとして主題的な二重化として位置づけることができる。そこで漢詩文の家の伝統が再発見される必要もあつたわけで、その価値観に基づいて、俊蔭の漂流した地は「唐」や「唐土」と呼ばれた」と述べられている。「宇津保物語の絵画的世界」(『物語と絵の遠近法』ぺりかん社、pp. 148 ~149)

3) 田中隆昭(2004)「『宇津保物語』と国際交流」(『交流する平安朝文学』勉誠出版、p. 94)

たびたびの試みをたまはりて、唐土に渡されぬ」は、朝廷の「宣旨」によって渡唐を命じられたという文脈であり、ここでの「唐土」は公的な性格が強いことが確認されよう。その一方、(b)には、「あとの風、大いなる波に漂はされて、知らぬ国に打ち寄せらる」とあり、「知らぬ国」という呼び方が見える。この「知らぬ国」に関しては、次節で詳述するが、ここではひとまず、当初の目的地に辿り着くことができず、見知らぬ国へ流されたとあるから、「知らぬ国」とは、公的な立場から一步離れた表現として理解しておく。この場面の「唐土」には、公的なニュアンスが強いと思われのだが、それでは『うつほ物語』全体ではどのように使われているのだろうか。まず、ここで「もろこし」という言葉について簡単に見ておきたい。「もろこし」に対して、『日本国語大辞典(第二版)』(小学館)は、「諸越(しょえつ)」の訓読からできた語か。諸越は百越などと同意)昔、日本から中国をさして呼んだ名称。また、中国から伝来した事物に冠して用いた。……中国の春秋戦国時代に、現在の浙江省を中心として勢力をふるっていた越との交通が盛んであったところから、本来はその地方をさしていたが、しだいに中国全土の呼称となり、唐(とう)・唐土(とうど)と同義化した」と解す。一方、「古語大辞典(小学館)」は、「昔、わが国で中国を指して呼んだ呼称。……多くの山野を隔てて遠いこと」とした上で、「語誌」において「諸越」の和訓かともいうが、「諸越」は中国の南部、低文化地域を指す名で中国の代表名とされる可能性は低い。国語の「もろこし」には遠隔という概念がうかがわれる例が多いので、中国を、もろもろの海山を越えた遠い異国の意で「もろこし」と呼び始めたと思われる。中国以外の外国を含めていると解される例もあり、日本の中でも遠く野や山を越えた所の意でいう可能性はあった」と解く。この二つの現行辞書の解説からも、「もろこし」の語源が確定しておらず、その見解が割れていることが窺われよう。また、「もろこし」の表記に関しては、『うつほ物語』の諸本では仮名で表記することが多いが、本稿で用いている「新編日本古典文学全集」などの注釈書で「唐土」と記すのは、おそらく物語が成立した歴史的背景を踏まえたものであろうと推察される。また、『うつほ物語』には「もろこし」以外にも「たう」という名称も見られ、この二つ呼び名に使い分けはないように思われることから、「日本国語大辞典(改訂版)」の解説のように、『うつほ物語』においては、ひとまず「唐」と見做してよいだろう。しかし、「古語大辞典(小学館)」の「語誌」が示唆するように、仮名の「もろこし」には必ずしも「唐」を指示しない可能性も否定できない。さらに、ひとつの物事に、多様な名が存在するということは、それぞれの名称の持つ固有の世界があるということであり、よって、その多様な名の意味するところを追究することは、物語の世界のヨミに繋がると考えられる。すると、「もろこし」が「唐土」と表記される

ケースがあるということをもって、すなわち「唐」と解すのではなく、やはり物語の中での「もろこし」という言葉が持つ世界を探る必要がある。本稿では便宜上「もろこし」を一応「唐土」と表記しているが、国名の「唐」そのものを意味するものではない。また、そういうところにこそ本稿で検討する「知らぬ国」との比較の意義があろう。ここで、『うつほ物語』に戻るが、次に並べた「唐土」の用例は、すべて俊蔭が訪れた場所を指している⁴⁾。

⑤〔兼雅〕「故治部卿俊蔭が娘の腹にはべり」と申したまへば、上おどろかせたまひて、〔朱雀帝〕「いかにぞ。三代の手は伝へたらむな。かの朝臣、唐土より帰り渡りて、嵯峨の院の御時、『この手少し伝へよ』と仰せられければ、『ただ今大臣の位を賜ふとも、え伝へ奉らじ』と奏しきりてまかでにしより、参らで、中納言になるべかりし身を沈めてし人なり。……」

(「俊蔭」一・106)

⑥上〔朱雀帝〕、俊蔭の朝臣、唐土より帰りて、嵯峨の帝の御前にて仕うまつりしを、ほのかに聞きて、またかかると世にはあらじとのみ思ひしを、これはこよなくまされり。

(「俊蔭」一・109)

⑦〔嬬・翁〕「……そのゆゑは、むかし、一人子を唐土に渡したまへりし人の御殿になむありし。……」

(「蔵開上」二・325)

⑧〔嵯峨の院〕「……(d)俊蔭の朝臣の、唐土より上りて琴奉りしに、その音例の琴にも似ず、響きよく、おどろおどろかりしかば、弾きとどめてともせしにも聞かず、聞かまほしかりしことも聞かせず。かかる異なることを好みし間に、書の道をばさる方にて、この方の師にせむ。女宮たちにも教へたてまつらむと、度々いはせしにも聞かで、かの尚侍を、父母の愛しがる人にては、限り

4) 『うつほ物語』には「唐土」が三五例見える。(『うつほ物語の総合研究1 索引篇自立語』室城秀之・西端幸雄・江戸英雄・稲員直子・志甫由紀恵・中村一夫編(勉誠出版、一九九九年))。本稿において□で囲った十三箇所は、すべて俊蔭が直接訪問した場所を指している。ただし、本稿で引用していない部分でも、例えば「俊蔭十六歳になる年、唐土船出だしたてらる」(「俊蔭」一・20)の「唐土」は、もちろん俊蔭の乗った船を指すが、「唐土船」はすでに一般名詞化して使われることもあるので、ここでは俊蔭の訪問した場所の例とは認めなかった。また「同じ唐土に渡りて持て上りたりし弥行が琴どもに似ず」(「吹上下」一・520)では、俊蔭の齎した琴と弥行の琴を比較する文脈であり、俊蔭と密接に関係するが、直接俊蔭の経験した異国の様子を描いている場面ではないのでやはり除外した。さらに、和歌などに「唐土」が詠まれる場合、暗に俊蔭の体験を響かせている用例もあるが、ここでは検討の対象から省いている。

なお、物語における「もろこし」という言葉の機能を論じたものとして、拙稿(2004)「権威付けの装置としての「唐土」と「高麗」——『うつほ物語』『源氏物語』『狭衣物語』を通して——」(『日本古代文学と東アジア』勉誠出版)、拙稿(2006)『源氏物語』異国関連用語考——「から」「もろこし」を中心に——」(『日本文学』第56巻第6号)などがある。

なくいたはしう、またなきものに思ひ取りて、心もありしかば、女方よりも、度々ものすることありしにも、いと心強う、心深かりし人にて、(e)朝廷を恨み、世の中を知らでなむ、身をも心づから沈めてし。(f)その折の大臣どもの、この国のための限りなき面目を広めむといひ、出だし立てしことを、ここには惜しみ思ひしかひなく、われ一人に恨みをとどめられしになむ、今に飽かずあはれに思ふ。……」。
(「楼の上上」三・465～466)

⑨おはしまさむさまの用意せむとて、治部卿の集の中にある、唐土よりあなた、天竺よりはこなた、国々の詩を、その年ごろの有様を、かの大將描かせたまへる屏風、例に似ず清らにうるはし、……
(「楼の上下」三・567)

⑩〔嵯峨の院の手紙〕「年高くなりはべりて、心地の惚れ惚れしうなりはべるに、この尚侍の家、むかし見たまへしゆかしさにまうで来て、琴弾かせて聞きはべるに、めづらかなることどもなむ。(g)故治部卿の朝臣、公人として侍りし跡だに。身を朝廷に従へて、唐土の使にまうで、仇の風に遭ひて、多くの年、父母の顔もあひ見ずして、悲しき目を見て、たまたま帰りはべりて後、同じきやうに、いくばくも侍らぬほどに亡くなりはべりにき。尚侍男ならましかば、一度に大臣にもなさまほしくなむ、今宵殊には思ひたまふる。これいと易きことに侍るを、ただ今、宣旨下したまへ。」と奏せさせたまふ。
(「楼の上下」三・611～612)

⑤は、朱雀帝が仲忠の琴の弾奏を聞き、昔、嵯峨帝の御前で行われた俊蔭の弾奏を想起する場面だが、さらにそれが朱雀帝の視点から語られている。また、⑥も朱雀帝の視点から述べられたもので、⑧は嵯峨の院の発言である。そして⑩は嵯峨の院の手紙の文言である。これらの用例から、まず「唐土」は帝（あるいは院）の言葉の中で用いられていることが多いということが推察される。ところで、⑧は、嵯峨院によって、「俊蔭の朝臣」が「唐土」から帰り、演奏した折のことが回想される場面だが、ここには、俊蔭がその勅命を拒み、(e)「朝廷を恨み」蟄居に入ったことが述べられている。引き続き(f)では、俊蔭の渡航が、「その折の大臣ども」に「この国のための限りなき面目を広め」させるためのものとして認識されていたことが語られている。さらに、引用本文⑩の嵯峨院の手紙の文言を見てみよう。⑩の(g)では、「故治部卿の朝臣」つまり俊蔭の渡航を、「身を朝廷に従へて、唐土の使にまうで」と記している。ここでの「唐土」は、遣唐使という官人としての役割に重きが置かれた言い方と解釈でき、「唐土」は公的な性格が強く存在する言葉であると考えられる。つまり、ここには、俊蔭の異国への旅が、「公人」として「唐土の使」であったと言明されており、以上のような用例の分析から、「唐土」は、俊蔭の私的な感想から呼び起こされるものではなく、公的な立場から語られる異国だったといえよう。それでは、このような公的な立場から発せられることの多い「唐土」に対して「知らぬ国」はいかに語られているのか、次節でさらに考察していきたい。

三 私的な感情から呼び起こされる「知らぬ国」

「知らぬ国」は、『うつほ物語』において三例確認することができる。その一つ目の用例は、前掲した引用本文④に見えるが、ここには「唐土」と「知らぬ国」の用例が一つの場面に集中しており、二つの言葉の相違点を探る上で、非常に興味深いところである。「唐土」という呼び方が、帝の立場から語られ、また公的な立場を重視している場合に述べられることが多いということは、すでに前節で述べてきた。ここで、本文④をもう一度確認してみよう。そこには(b)「あとの風、大いなる波に漂はされて、知らぬ国に打ち寄せらる。深き悲しび、これに過ぎたるはなし。からくして帰りまうで来たるに、父母亡びて、空しき宿をのみ見る」とあり、「これに過ぎたる」ことのない「深き悲しび」が「知らぬ国」への漂流によって引き起こされ、さらに、それが俊蔭本人の発言として発せられているということが分かる。これは、まず、前節で検討した「唐土」とはまったくその性質を異にする表現といえよう。この「知らぬ国」が、俊蔭一族の発言の中で現れ、さらにその悲哀を含み持つ表現として発せられているということは、以後の場面にも見ることができる。先に検討した引用本文④は、俊蔭が、帝に向かってその渡航の悲劇を吐き出し、「琴の師」としての出仕を断る場面だが、その後、彼は家に蟄居し、自分の娘にのみ秘琴の奏法を教える日々を送ることになる。

⑪かかるほどに、娘、十五歳になる年の二月に、にはかに母かくれぬ。それを嘆くほどに、父病づきぬ。父、弱くおぼゆるときに、娘を呼びていふやう、〔俊蔭〕「われ、ありつる世には、わが子に高き交じらひをもせさせむと思ひつれども、若くては知らぬ国に渡り、この国に帰り来ても、おほやけにもかなひ仕うまつらでほど経れば、貧しくて、わが子の行く先の掟せずなりぬ。天道にまかせ奉る。……」とのたまひて……（「俊蔭」一・45～46）

帝の仰せを断り、宮中社会との交流を断ち切った俊蔭は、臨終の時が近くなると自分の半生を語り出すのであった。若くては「知らぬ国」へ渡り、また帰ってきてからも、朝廷にお仕えしなかったのが家は貧しくなり、娘の将来のことを定められなくなってしまったと――。死期を迎えた彼が自分の人生を「知らぬ国」という語を通して反芻していることから、この語に含蓄された悲哀が読み取られよう。こうした「知らぬ国」は、楼の上下巻でもう一例見出される。

⑫大将、次に横笛を声の出づる限り吹きたまふ。……暁になりゆく空静まり、の

どかなるに、治部卿の集の書の中に、唐土より知らぬ国に至りて、下りて道を行きたまひけるに、いみじうあはれに面白き所々に、四季の花咲き乱れ、ある所には、恐ろしくいみじきかたちしたる者集まりてあるわたりを過ぎたまふとて、道のままに長く思ひ続けて、あはれなる声を出だして誦じたまへる、また帰りて後、家の寂しきを眺めて、時につけつつ作り集めたまへる詩を、誦じたまへる、聞き知らぬ人だに涙落とさぬはなきに、まして、大将の、この所にて誦じたまへるは、声よりはじめて面白うあはれなるに、御直衣の袖、まして絞るばかりになる。（「楼の上下」三・551～552）

『うつほ物語』の大団円である楼の上下巻では、俊蔭娘、仲忠、いぬ宮が集い、七夕の日に琴の弾奏が行われる。そして、仲忠は、俊蔭が「知らぬ国」で制作した詩集を誦じるのであった⁵⁾。「恐ろしくいみじきかたちしたる者集ま」っている所を通りながら、そして帰国してからは「家の寂しきを眺め」ながら作った詩集の暗誦に、「聞き知らぬ人だに涙落さぬはな」と語られているように、俊蔭の放浪は彼に悲劇をもたらした根元に他ならなかった。俊蔭の異国への旅には「渡唐の栄光と悲惨」⁶⁾が描かれているとされるが、「知らぬ国」という言葉は、まさにその「悲惨」を象徴的に物語っているといえよう。この「知らぬ国」と近似した表現として「知らぬ世界」という語が二例見えるが、二例とも俊蔭の放浪の地を指している。

⑬俊蔭、付し拝みていはく、「日本よりこの山を訪ぬる大いなる心ばへは、父母が愛子として、一生にひとり子なり。親のかへりみのあつく、慈悲の深かりしを捨てて、国王の仰せのかしこかりしによりて渡れり。その父母、紅の涙を流してのたまはく、『汝、不孝の子ならば、親に長き嘆きあらせよ。孝の子ならば、浅き思ひの浅きにあひ向かへ』とのたまひき。さるを、俊蔭、あたの風、大いなる波にあひて、ともがらを滅ぼして、ひとり知らぬ世界に漂ひて、年久しくなりぬ。しかあれば、不孝の人なり。……」といふときに、……（「俊蔭」一・26）

阿修羅に向かつて、俊蔭は、「慈悲」深い「親」を振り捨て、国王の仰せによって渡航するようになったと、ここまで流されてきた経緯を説明する。「あたの風、大いなる波」に飲み込まれ、一緒に出発した同僚は亡くなり、自分独りだけが「知らぬ世界」に「漂」わされてしまったと語るなのであった。さらに、この「知らぬ世界」という表現は、楼の上下巻でも、俊蔭娘の回想の中で語られる。

5) この場面の「唐土より知らぬ国に至りて」の部分は、俊蔭巻の内容と合致しない。このように、『うつほ物語』には前後の整合性が取れていない表現がしばしば見えるが、これは今後の課題としていきたい。

6) 益田勝実（1966）「物語の成長期——発端の構造——」（2）『日本文学』15号、p. 570

- ⑭大将、尚侍のおとどうち休みたまへるやうなる折なり。折に合ひたる節のいとあはれなるを、遥かにうち誦じたまひつつ、
 〔仲忠〕唐土の山の山彦聞きつけてそよやといふまで響き伝へむ
 となむ。臥したまへれど、いとどしう聞きつけたまひて、涙こぼれたまふこと限りなし。臥しながら、^{きん}琴に、忍びやかに、
 〔俊蔭娘〕山彦はそよやといふとも調べ置きし人なき宿を見るかひもなし
 心に思ひ臥したまへるは、世の中を見れば、いひ知らぬ人も、しかあれば、才も時に合ひ、人々しければこそ、めでたうかひあれ。人より殊に才ものしたまひけれど、ここにしかひあることもなく、知らぬ世界に、年若うして行き伝はりたまひつつ、悲しき目の限りを見たまひて、多くの年を経たまひて帰りましたまひて、うちははめ、世の中のこと飽かぬことを嘆きて、年月を明かしたまひけるほどに、また頼もしくいひ伝へ置きたまはむ人もなく、何ごとも、わが身人並み並みになすべきことも及ばず、年高うなり、心細く思したまひけるまに、これをまた嘆きとしたまひて、十六年の間、多くの涙を落とさせたまつりて生ひ立ちける報いにや、また知らず、悲しくいみじき目を見せけむ。
 (「楼の上下」三・527～528)

ここには、人並みならぬ才能を持ちながら「知らぬ世界」で「悲しき目の限り」を見てきた俊蔭が、帰国してからもなお「世の中のこと飽かぬことを嘆」いていたことが、俊蔭の娘によって反芻されている。「知らぬ世界」は「知らぬ国」とほぼ同様の意味合いで用いられているが、とくに注目すべきは、この語が、俊蔭の渡航がもたらした悲劇を象徴するという、ひとつの表現として昇華しているということである。すなわち「知らぬ国」や「知らぬ世界」は、彼の悲劇の人生を表徴する言葉として、そして俊蔭やその一族によって語られるものであったのである。

『うつほ物語』の世界を、三田村雅子氏は、「公的な権威の代表である天皇に対して、俊蔭の私的な情念が鋭く対立」⁷⁾していると論じられるが、「唐土」と

7) 三田村雅子 (1983) 氏は、「渡唐の苦難とその後の栄達という幸福な円環の神話が崩れてしまった後も、なおうけつがれた「おそれの相伝」をこの物語はこのような父母への恩愛を強くうち出すことによって語っていかうとするのである。その父母への思いを俊蔭にたち切らせたのは、見てきたように、琴に生きようとする俊蔭自身の内的な決意であり選択でもあったのであるから、帝の宣旨のみを非難するのはいささか筋違いでもあり、八つあたりでもあったかもしれない。それにしても、帰国後八年以上経過したこの時点で、帝を詰まらないではいられない俊蔭の姿が提示されることによって、おだやかな日本での空白のままの日々のなかにあつて、おそらく帝以上に俊蔭は自己の不幸の罪を語り続けていたのだということが知らされる。……公的な権威の代表である天皇に対して、俊蔭の私的な情念が鋭く対立していくというこの構図は以後うつほ物語を一貫しており、天皇と琴ひく一族の対立・⁽⁷⁾緊調関係を基軸として展開形成されたのがこの物語であると言ってよいであろう。」と述べられている。「宇津保物語の〈琴〉と〈王権〉——繰り返しの方法をめぐって——」(「東横国文学」第15号、P. 46)

「知らぬ国」という使い分けから、まさにそうした構図が鮮やかに読み取られるのではないだろうか。言い換えれば、渡航によって父母との離別を余儀なくされる、などといった俊蔭の私的な悲劇を喚起させる場合は「知らぬ国」、そして、朝廷の「宣旨」による渡航、つまり「公人」としての立場を強調するときには「唐土」というふうに、俊蔭が訪れた異国は、どちらの立場から語られるかによって、その使い分けがなされているのである。

四 「^し知らぬ^{くに}国」という空間表現の重層性

前節では、『うつほ物語』で俊蔭の流離した「知らぬ国」は、単なる異国ではなく、父母との離別を強いられ、帰国してからも宮廷社会に乖離してしまう個人の悲しみや不遇を象徴する表現であったと述べた。本節では「知らぬ国」を、語のレベルから分解し、より詳細に検討したいと思う。周知の通り「しらぬくに」の「しらぬ」は「しる」の未然形だが、「しる」は、どういう意味体系を持っているのだろうか。まず、現行の辞書から確認してみよう。『日本国語大辞典（第二版）』は、「しる」という項目に「知・領」の漢字を当て、次のように解す。

しる【知・領】（『日本国語大辞典（第二版）』小学館、二〇〇一年）

- 《自ラ五(四)》物事の性質、なりゆき、対処すべき方法などが分かる。……
- 《他ラ五(四)》（知）①物事の発生、存在、状態、内容、趣きなどをわきまえる。……②考えに入れる。考慮する。……③実際に行なってみたり、見聞したりする。経験する。……*竹取「ある時には、風につけてしらぬ国に吹きよせられて」……（領）①ある範囲の土地などを治める。統治する。（稿者注—後掲資料⑮『源氏物語』の用例）……②ある場所、土地などを領有する。……

下線を引いた③の「実際に行なってみたり、見聞したりする。経験する」の解説によると、「しらぬ国」とは、ひとまず、実際に行ってみたことのない、見聞・経験したことのない国という意味になろう。一方「しる」には、「領」の字を当てる「ある範囲の土地などを治める。統治する」という意味も存在する。『日本国語大辞典（第二版）』も指摘するように、『源氏物語』には、「しる」が「統治する」という意味合いで使われる用例が見える。

- ⑮この大臣の御おぼえいとやむごとなきに、母宮、内裏のひとつ后腹になむおはしければ、いづ方につけてもいとはなやかなるに、この君さへかくおはし添ひ

ぬれば、春宮の御祖父にて、つひに世の中をしりたまふべき右大臣の御勢ひ
は、ものにもあらずおされたまへり⁸⁾。 (「桐壺」一・48)

光源氏が左大臣の婿君となったため、将来天下の政治を牛耳るはずだった右大臣の勢いが圧されてしまったという。ここの「しる」はもちろん「治める」「統治する」という意味だが、さらに『うつほ物語』には、「しる」と「国」が一緒に用いられ、統治するという意味として使われている用例が四例見られる。まず、次は、藤原の君巻の冒頭で源正頼が紹介される場面である。

⑯むかし、藤原の君と聞こゆる一世の源氏おはしましけり。童より名高くて、顔かたち、心魂、身の才、人にすぐれ、学問に心入れて、遊びの道にも入り立ちたまへり。ときに、見る人「なほかしこき君なり。帝となりたまひ、国しりたまはましかば、天の下豊かなりぬべき君なり」と、世界こぞりて申すときに、…… (「藤原の君」一・129)

もし、源正頼が、帝位に就き「国しりたまはましかば」、つまり国をお治めになったら、国を繁栄させたであろう、と世間の人々が噂しているというのである。また、

⑰かかるほどに、年月過ぎて、その時の帝〔嵯峨帝〕も下り居たまひ、東宮国しりたまひて、年ごろ世の中平らかに、国栄えてあり。 (「春日詣」一・257)

とあり、「国しりたま」うとは、嵯峨帝が譲位して東宮が即位し国を統治することを意味している。このように「国し」という言葉が、国を治める、統治するという意味として用いられるのは、それほど珍しい用例ではなく、次の二例からも確認することができる。

⑱限りなく遊ぶに、上〔朱雀帝〕「ここらの年ごろ、嵯峨の院の御時にも、国しりて後も、見どころあることなかりつるに、さこそいへ、ただ今の大将たち、少し例の人にたちまさりたる人にて、心づかひせられけむ、いと労あるかな。……」とのたまふ。 (「内侍のかみ」二・204)

⑲大将〔仲忠〕「内裏に候ひし頃、宮も、上に、かかる御気色御覽ぜさせむとにやありけむ、とどめたてまつりたまひて、二日ばかりおはしますめりきかし。ありしよりも、いと景迹になりまさりたまひにためり。国しりたまふべきことも近げになむ」。 (「蔵開中」二・497)

8) 『源氏物語』の本文の引用は、すべて「新編日本古典文学全集」による。ただし、私に表記、句読点を改め、ルビを省略した箇所がある。また、引用本文中の下線や〔 〕内の注記などは、すべて引用者によるものである。

以上で見てきたように、「しる」という語には、「治める」「統治する」という意味が含まれており、とくに「国」と一緒に使われる場合は、「国を統治する」という意味を強く有する。そうすると、「しらぬ国」という言葉に対して、「経験のない国」というような限定した解釈をしてよいのだろうか。『源氏物語』では「しる」が「統治する」という意義で用いられ、さらに『うつほ物語』では「国し」という表現が「国を統治する」という意味で使われている以上、「知らぬ国」に関しても「統治しない国」という解釈の可能性があり得るのではないだろうか。そして、実際『万葉集』巻一の雑歌五〇番には、「藤原宮の役民が作る歌」⁹⁾が載っているが、上記で述べた、統治しない、政治の力が及ばない場所というニュアンスの強い「知らぬ国」の用例が存在するのである。

やすみしし 我が大君 高照らす 日の皇子 荒たへの 藤原が上に 食す国
を見したまはむと みあらかは 高知らさむと 神ながら 思ほすなへに
天地も 依りてあれこそ 石走る 近江の国の 衣手の 田上山の 真木さく
櫛のつまでを もののふの 八十字治川に 玉藻なす 浮かべ流せれ そを取
ると 騒く御民も 家忘れ 身もたな知らず 鴨じもの 水に浮き居て 我が
造る 日の御門に **知らぬ国** よし巨勢道より 我が国は 常世にならむ 凶
負へる 奇しき亀も 新代と 泉の川に 持ち越せる 真木のつまでを 百
足らず 筏に作り のぼすらむ いそはく見れば 神からならし

右、日本紀に曰く、「朱鳥七年癸巳の秋八月、藤原の宮地に幸す。八年甲午の春正月、藤原宮に幸す。冬十二月、庚戌の朔の乙卯に藤原宮に遷居らす」といふ。

『万葉集』の巻一に、王徳讃美の歌が集中していることは周知の通りだが、とくに上記の歌は、藤原宮を讃美する歌となっている。「新編日本古典文学全集」の頭注は、当該歌の「知らぬ国」に対して「国交のない国」とし、傍線部に対する現代語訳では「我々の作った日の朝廷に 異国をも よしこせという名の巨勢道

9) 『万葉集』の引用は、「新編日本古典文学全集」による。

藤原宮之役民作歌

やすみしし わがおほきみ たかひさす ひのみこ あらたへの ふはらがうへに をすくにを めしむむと
八隅知之 吾大王 高照 日乃皇子 荒妙乃 藤原我宇倍尔 食国乎 売之賜牟登
みあらかは たかしらさむと かながら おもほすなへに あめつちも よりてあれこそ いはゆる あかみのくにの
都宮者 高所_し知武等 神長柄 所_し念奈戸二 天地毛 縁而有許會 磐走 淡海乃国之
こもでの やそうぢがはに たまもなす うかべ_しせれ そをとると さわくみたまも いへれ みもたなしら
衣手能 八十氏河_し尔 玉藻成 浮倍流礼 其乎取登 散和久御民毛 家忘 身毛多奈不_し
知 鴨じものみづにうき居て わがつく ひのみかどに **し_らぬ_くに** よしこせ ぢより わがくには とこよにならむ
す 鴨自物水_し尔浮居而 吾作 日之御門_し尔 **し_らぬ_くに** 依巨勢道_し従 我国者 常世_し成牟
凶負留 神亀毛 新代登 泉乃河_し尔 持ち越_し流 真木乃都麻手乎 百不_し足 五十日太尔作
のぼすらむ いそはく見れば 神随_し有_し之

右、日本紀曰、朱鳥七年癸巳秋八月、幸_二藤原宮地_一。八年甲午春正月、幸_二藤原宮_一。冬十二月、庚戌朔乙卯、遷_二居藤原宮_一。

から」と解す。この歌での「知らぬ国」が「日本の朝廷の統治圏にない国」を意味することは明確であろう。さらに、その他の注釈書は、傍線が引かれた「知らぬ国よし巨勢道より」に関して、「支配下にない異国を「寄しこせ」（「新潮日本古典集成」）、「異国をも服従させ給え」（「新日本古典文学全集」）と解している。「知らぬ国」が、強い政治性を含蓄した表現として解釈されているのである。

以上で述べたように、「知らぬ国」という言葉が、『万葉集』の極めて政治性の高い歌の中で用いられていることや、『うつほ物語』や『源氏物語』の用例などを考え合わせると、本稿で検討している「知らぬ国」も、〈行ったことのない見知らぬ国〉という意味だけではなく、〈統治しない国、為政者の勢力が及ばない国〉という意義をも含み持つものとして理解せざるを得ないだろう。

もっとも、異国が、当国の政治力が及ばない地域や国を指すことに鑑みると、俊蔭が流離した異国が「知らぬ国」と語られるのは、当然といえば当然かも知れない。そういう意味においても、「知らぬ国」には、「行ったことのない見知らぬ国」という意味とともに、俊蔭が属している「日本」^{ひのもと}の為政者の勢いの及ばない異国という響きも含みこまれていたといえよう。言い換えれば、俊蔭が流れ着いた「知らぬ国」とは、〈俊蔭が経験したことのない国〉という意味とともに、

〈「日本」^{ひのもと}の為政者の権力の及ばない異国〉という、多様な響きが共存する表現として読み解かれよう。しかし、このような読解は、「知らぬ国」が俊蔭の私的な悲哀を吐露するための空間表現であったという本論の主旨と一見矛盾するように思われるかも知れない。だが、「唐土」が遣唐使という宮中世界との結び付き、皇室の臣下という響きが強く含まれた場合に用いられる表現であったことを考え合わせると、「知らぬ国」とは、当国の政治力がまったく及ばない国という意味において、まず、その宮中との繋がりまでもが途切れた世界ということになるだろう。そしてそれは、遣唐使としての位相や、それ相応の権威が保証される「唐土」という表現に比して、「知らぬ国」は、すでに朝廷との関わりを持たない私的な空間であり、だからこそ日本^{ひのもと}の保護や帰国後の将来もまったく期待できない場所であることを意味するともいえる。言い換えれば、「知らぬ国」とは、文人貴族の最高の栄光であった遣唐使、そしてその役割をし終えた後に待っているだろう栄達もが、まったく期待できない国という含みを持つ表現であったのである。そしてそれは、仮に俊蔭自身は遣唐使としての権威や栄華を望んでいなかったとしてもでもある。また、こういう意味において、俊蔭の放浪した「知らぬ国」という重層的な表現世界が繰り広げられるのではないだろうか。

五 『うつほ物語』における異国呼称の機能

俊蔭の異国漂流による悲劇が「知らぬ国」という言葉をもって繰り返し描かれているのは、以上で述べてきたような重層的な表現世界があるからではないだろうか。先述したように、「知らぬ国」は、朝廷と俊蔭の感情がぶつかり合う中で、俊蔭の私的な悲哀や情念を語る際に用いられた表現であった。俊蔭と朝廷との葛藤の原因については、学者としてのプライド¹⁰⁾、あるいは不孝者にさせられた恨み¹¹⁾、といったようなことが挙げられるが、とくに西本香子氏は、俊蔭が「極めて優れた皇嗣権をもちながら臣籍に下った貴公子」であることに注目し、「卓越した血統と頭脳の持ち主である彼は、まさしく王権回復を志向する物語の主人公にふさわしい」¹²⁾と指摘された。俊蔭と朝廷の葛藤のありようを考える上で示唆するところが大きい。ただし、氏は、俊蔭が皇位を脅かす危険人物の影を帯びながらも、なおその造型は奈良時代の有能な律令官人であった清原夏野に酷似すると述べた上で、天皇を脅かす人物ではなく、むしろその協力者として位置づけるべきと解かれる。しかしながら、俊蔭を天皇家に充実した官人、純粋な輔弼者として理解するのは、いかがであろうか。俊蔭は前節の引用本文④で語られたように、度重なる帝の勅命を拒み、さらに⑧では「朝廷を恨み、世の中を知らでなむ、身をも心づから沈めてし」と語られているように、決して朝廷に従順な

10) 大井田晴彦 (2002) 「物語作家の世界——その文人精神をめぐって——」 (『うつほ物語の世界』風間書房, pp. 291~292)

11) 三田村雅子 前掲論文, pp. 42~46

12) 西本香子 (2002) 氏は、「極めて優れた皇嗣権をもちながら臣籍に下った貴公子——それが清原俊蔭である。卓越した血統と頭脳の持ち主である彼は、まさしく王権回復を志向する物語の主人公にふさわしいといえよう。しかしだからといって、これを王権物語の発端とみることには慎重でありたい。ここで俊蔭が清原姓を名っていることに着目したいのである。皇親賜姓において、祖先の王名をそのまま名のるということは、極めて稀であった。したがって「俊蔭」巻冒頭で「清原王」「清原俊蔭」とあるのは明らかに、主人公の系譜における清原姓の強調である。「清原真人」といえば天武天皇の皇子である舎人親王の後裔に与えられた姓であり、この系譜にある人物でまず第一に想起されるのが清原夏野であろう。」とし、「夏野はいわば、理想的律令官人であった。その夏野の蔭を帯びた俊蔭の人物像は、潜在王権の発現を志向する王権物語とは相容れない方向性をもつといってよい。したがって、あえて「清原」姓を強調した物語の意図を汲むならば、清原王の婚姻に始まる俊蔭巻の冒頭について、王権譚とはまた別の方向性での解釈が要請されることになる」と述べる。そして、「第二の首巻の冒頭に語られた清原王と皇女の婚姻は、主人公俊蔭の出自を示すのみでなく、政争に明け暮れた血腥い時代を物語前史として暗示し、物語世界がそのような暗黒の時代を抜け出した新たな「平安」時代の始まりとしてあることを示しているのである。そこに登場する主人公はけっして天王を脅かす存在ではなく、近しい皇親として天皇を補弼し、共に新たな時代を築いていく協力者として語られている。」と結論づけている。「『うつほ物語』の生長力——物語の二つの発端から——」 (『古代中世文学論考 第七集』新典社, pp. 51~53)

官僚ではなかった。結果的に俊蔭が異国から齎した^{きん}琴や書物は、俊蔭一族を天皇家の深層に結び付ける役割をしてはいるが、俊蔭自身は、決して天皇家に融和することなくこの世を去っている。このようなことを考え合わせると、俊蔭を朝廷の理想の律令官人として位置づけることはやはり困難であろう。「王権回復を志向する物語の主人公にふさわしい」¹³⁾とされる俊蔭は「朝廷を恨」んでいた。そこからは、やはり天皇家との葛藤や対立を読み取るべきではないだろうか。栄光のはずだった遣唐使としての地位が、結果的に俊蔭自身には悲劇そのものでしかなかった。俊蔭と朝廷側には遣唐使に対して認識のズレが懸隔しており、その歪みが「知らぬ国」と「唐土」という表現の違いとなって表われているのではないだろうか。言い換えれば、「知らぬ国」とは、公的性格の強い「唐土」の裏側に存在する、俊蔭個人の悲劇や悲哀を物語る空間表現であったのである。そして、「朝廷」に「恨み」を持つ俊蔭にとって「知らぬ国」は、「行ったことのない見知らぬ国」に止まらず、もはや朝廷の保護や帰国後の将来までも期待できないという意味において「宮中社会の政治力の届かない国」でもあったといえよう。

六 おわりに

本稿では、「唐土」と「^し知らぬ^{くに}国」という異国を表す言葉の相違点を分析することによって、『うつほ物語』における俊蔭の渡航の意味をさぐってみた。俊蔭の異国への漂流、それは、帝をはじめとした朝廷側からすると、選ばれた文人官僚に与えられる栄光であったが、俊蔭個人には父母との別れを強要される悲哀でもあった。物語には、その遣唐使をめぐる認識のズレや歪みが、「唐土」と「知らぬ国」という異なる異国の呼称として表れている。まず「唐土」は俊蔭に担わされた遣唐使という公的な立場から語られる異国というニュアンスが強いといえる。そして「知らぬ国」は、俊蔭の経験のない見知らぬ国という意味とともに、宮中社会との影響関係をまったく見出せず、もはや遣唐使としての栄光さえも見失ってしまった世界という意味が共存する。だからこそ、俊蔭は、自らの放浪地を「唐土」ではなく「知らぬ国」と語り続けたのではないだろうか。

『うつほ物語』は、しばしば秘琴伝授とその一族の栄華の物語と言われるが、それを可能にした俊蔭の異国への旅、それは決して栄光の側面だけが存在するものではなかったということが、こうした異国の呼称によって表れているといえ

13) 西本香子前掲論文、p. 51

る。とくに、俊蔭一族によって語られる「知らぬ国」とは、俊蔭が経験したことの無い見知らぬ世界という意味と同時に、文人貴族の栄光である遣唐使として旅だったはずの異国が、実はその栄光を提供する宮中社会との影響関係がまったく見出せない世界であったという意味において、俊蔭の私的な悲哀が語られる空間表現であったといえよう。そして物語全体を通して、俊蔭の旅地が、公的世界を代表する天皇側からはあくまでも「唐土」と呼ばれ、俊蔭一族からは「知らぬ国」と語り続けられているところにこそ、天皇と俊蔭一族の乖離・対立関係が読み取られるのではないかと思う。

【参考文献】

- ・阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男 校注・訳 (1994~1998) 『源氏物語』①~⑥
「新編日本古典文学全集」小学館
- ・伊藤博・清水克彦・橋本四郎 校注 (1976) 『万葉集 一』「新潮日本古典集成」新潮社
- ・大井田晴彦 (2002) 「物語作家の世界——その文人精神をめぐって——」『うつほ物語の世界』風間書房、p. 291~292
- ・小島憲之・木下正俊・東野治之 校注・訳 (1994) 『万葉集 ①』「新編日本古典文学全集」小学館
- ・佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅生・山崎福之校注 (1999) 『万葉集 一』「新日本古典文学大系」岩波書店
- ・中野幸一校注・訳 (1999~2002) 『うつほ物語』①~③「新編日本古典文学全集」小学館
- ・西本香子 (2002) 「『うつほ物語』の生長力——物語の二つの発端から——」(『古代中世文学論考 第七集』新典社、p. 51)
- ・高橋享 (1991) 「宇津保物語の絵画的な世界」『物語と絵の遠近法』ぺりかん社、p. 149
- ・田中隆昭 (2004) 「『宇津保物語』と国際交流」『交流する平安朝文学』勉誠出版、p. 94
- ・益田勝実 (1966) 「物語の成長期——発端の構造——」(2) 「日本文学」Vol. 6、p. 570
- ・三田村雅子 (1983) 「宇津保物語の〈琴〉と〈王権〉——繰り返しの方法をめぐって——」
「東横国文学」第15号、P. 46
- ・室城秀之・西端幸雄・江戸英雄・稲員直子・志甫由紀恵・中村一夫編 (1999) 『うつほ物語の総合研究 1 索引篇自立語』勉誠出版

要 旨

『うつほ物語』は、一言でいえば、俊蔭一族の秘琴伝授と栄華の物語といえよう。この一族に類稀な栄達を齎した秘琴は、俊蔭の異国への辛苦の旅の末、持ち込まれたものであった。その異国への旅立ちは、遣唐使としての栄光のみならず、私的な不幸をも招来したものであった。俊蔭の異国への漂流をどう捉えるか、それは『うつほ物語』を理解する上で、欠くことのできない極めて重要な問題である。つまり、その旅が、一族に繁栄を齎した栄光のものだったのか、それとも悲劇だったのか。それを紐解くひとつの鍵として、まずその異国を指す名称の分析が必要である。というのも、物語は、俊蔭が流された異国を、「唐土」とも「知らぬ国」とも語っており、この呼び方を考察することが、物語の理解に繋がると考えるからである。

俊蔭の異国への漂流、それは、帝をはじめとした朝廷側からすると、選ばれた文人官僚に与えられる栄光であったが、俊蔭個人には父母との別れを強要される悲哀でもあり、また結果的には帰国後の不幸までも齎したものであった。物語には、その遣唐使をめぐる認識のズレや歪みが、「唐土」と「知らぬ国」という異なる異国の呼称として表れている。「唐土」は宮中社会の一員として俊蔭に担わされた遣唐使という公的な立場から語られる異国というニュアンスが強い。一方、「知らぬ国」とは、俊蔭の経験したことのない見知らぬ国という意味とともに、遣唐使としての栄光のはずだった異国への旅が、実は宮中社会との繋がりがまったく見出させない場所であったという意味において、「朝廷の勢力の届かない国」でもあり、俊蔭の悲しみ、憂いの私的な感情が表出される表現であった。そして物語全体を通して、俊蔭の旅地が、公的世界を代表する天皇側からはあくまでも「唐土」と呼ばれ、俊蔭一族からは「知らぬ国」と語り続けられているところこそ、天皇家と俊蔭一族の乖離・対立関係が読み解かれるのではないかと思う。

キーワード：『うつほ物語』 俊蔭 異国 唐土 知らぬ国

투 고 : 2008. 11. 30
1차 심사 : 2008. 12. 13
2차 심사 : 2008. 12. 27